

■プレゼンテーション 6■

哲学カフェにおけるファシリテーターの役割とは？

キーワード：哲学の役割、ファシリテーターの役割、一人で哲学することと哲学カフェで哲学することの違い
中岡晃也（タイワビト主宰）

「哲学カフェ」と一言で括っても、その実、さまざまな哲学カフェがあるかと思います。あるとき、哲学カフェの参加経験が多い後輩が、僕の哲学カフェと他の哲学カフェとの違いをいろいろと話してくれました。僕自身もいくつか参加経験があるのですが、やはり、それぞれ体験した感覚は違いますし、自分自身がやっている哲学カフェともそれらは違うかと思います。

それでは、その違いはどこからくるのか。それはみなさまもなんとなくお気づきの通り、ファシリテーターのふるまいなのではないでしょうか。おそらく、ファシリテーターのふるまい・機微の一つ一つが場に大きな影響を与えていることは間違いないでしょう。

しかし、そのふるまい・機微はなんでもいいのでしょうか？形式的に哲学カフェ“的”であれば、すべて「哲学カフェ」と呼んでしまってもいいのでしょうか？本当のところ、哲学カフェのファシリテーターにはある程度定式化する「役割」というものがあるのではないのでしょうか？それは、真正な哲学対話を生み出すためにも検討する必要があるかと思います。

本発表はそのような問題設定から「哲学カフェにおけるファシリテーターの役割」についてプレゼンテーションさせていただきます。

具体的な発表内容としては、まず、認知科学の分野において認知の力学系理論を推奨している哲学者 Tim van Gelder 氏の「Roles of Philosophy in Cognitive Science」における7つの哲学の役割、および、それを受けた名古屋大学の戸田山和久氏（科学哲学）が考える哲学の役割を紹介します。その知見を踏まえた上で、私自身の具体的な哲学プラクティスの実践例をもとに「哲学カフェにおけるファシリテーターの役割」を検討していきます。

発表を聴いてくださる方の中には、わたしの考えるファシリテーターの役割に共感する方、一部共感しない方などさまざまな方がいるとは思いますが、本発表で哲学プラクティスをされている当事者の方々ひとりひとりが、日頃の自らのふるまい・機微をあらためて振り返り、再検討・再発見する機会になれば幸いです。

（なかおか・こうや）1989年 北海道生まれ。2009年より「対話」に関心を持ち、研究と実践を開始する。300を超えるさまざまなテーマのワークショップへの参加経験と実施経験から、社会問題の源泉を「非対話的な身体性」と捉え、その糸口として「問い」に着目した活動（問いの教室、問いのアトリエ、問いのセッションなど）を2015年から本格化している。